

筑波大学日本文学会会報

第36号

2012年2月

伝来・蒐集・価値（谷口孝介）	1
日本文学会だより	4
研究室だより	6
卒業生だより	13
日本文学会教員学生名簿	15

伝来・蒐集・価値

谷 口 孝 介

台北故宮博物院の精華が、二階の陶磁器、書画の展示であることは言うまでもない。がそれとは別に訪れる機会があることに、楽しみにしている展示室がある。一階の図書文献特別展示室と「子子孫孫永宝用」と銘打たれた清代皇室文物収蔵室とである。図書文献の部屋は折々にテーマを設定した展示で、たとえば武英殿版本や皇帝の起居注冊を含む宮中档案、はては伊藤博文や李鴻章の署名の存する馬関条約の原本が展示されており、歴史の現場に触れ得てただに身震いを感じる。いっぽうの清代皇室の部屋は常設展ではあるが、故宮の文物の由来を明示するもので、故宮ならではの展示と言える。ことにコレクターとしての乾隆帝の審美眼にスポットを当てて、一々の宝物の来歴が明らかになるように工夫されている。「以詩為記」というように、文物のなかには皇帝の御製詩が刻印されており、皇帝自身の文物に対する感性がじかに伝わるものである。また蒐集された文物の体系化や整理保管に関する展示もあり、博物館好きには感に堪えないものとなっている。

平成二十三年度の本学附属図書館特別展は、「日本人のよんだ漢籍―貴重書と和刻本―」であった。二十二年度、二十三年度と本学

の清登典子教授が代表を勤める、附属図書館所蔵の漢籍和刻本調査の一員に加わった縁で、今般の特別展のお手伝いをさせていただくこととなった。そのおりにまず感じたこととして、本学所蔵の漢籍が、多岐にわたり体系的な蔵書となっている点である。どの分野の書籍であっても、新古を問わなければ、とりあえずは標準的な書物を手にすることができるのである。それはやはり、林泰輔や南摩綱紀などの本学関係者の蔵書コレクションが一括して収蔵されているのに拠るところが大きい。漢学の先学の蔵書体系をそのまま継承したゆえ、漢籍に関して言えば、ほぼ遺漏のない集書がなされたのである。その点、質は異なるが、「鈴木虎雄関係史料」七六四点が平成二十二年度末に一括寄贈されたことも、今後の研究教育にとって、本学のみならず学界にとって有意義なことと言えよう。ひとつひとつの資料を取り出してみると、それだけでは持つ意味が明白ではないものが、こうして一括資料のなかで調査・体系化してゆくと、ひとつの孤独な資料が有機的連関をもって輝き出すことがある。この七六四点がどのような輝きを発揮するのか、日本近代史研究の中野目徹教授によつて端緒が開かれたばかりである。

書物の由来とえば、版本に付された跋文も書物に対する思いが充溢する、それ自体文学作品として読まれるべき文章であることが、今さらながら認識させられた。今回の展示のなかでは、一点の『孝経』の跋文は秀逸である。文政六（一八二三年）跋を有する「古文孝経」と文政九（一八二六年）跋の「御注孝経」とである。前者は該書の原本である弘安二（一七九九）年写本の所蔵者である福山藩主阿部正精まさよしにより、後者は同じく原本北宋版本の所蔵者であった狩谷椽斎による、それぞれ大文章である。そもそも『孝経』とは、から始まり注釈史・伝来、該本の価値にまで説き及ぶ、まさに研究課題とも呼びうる濃密な文章である。ちなみに阿部侯に拠るものが、お抱え儒者伊沢蘭軒の代筆であること、森鷗外『伊沢蘭軒』百五十二回から百五十四回に見える。

『白氏文集』にかかわる江戸時代前期の三種の跋文も、読み比べてみると、なかなか興味深いものである。一つは日本における最古の『白氏文集』出版である、那波道円により古活字本に付された「白氏文集後序」（元和四（一六一八年））である。これも長大な作品である。他の唐代詩人に比して『白氏文集』のみがほぼ完全に伝わった幸福を説き、日本における伝来状況に及ぶ。ただ五山における白詩に対する等閑視に力点が置かれている点、道円の関心の在りかが知られる。師の藤原惺窩や林羅山などのやや屈折した白詩評価も興味深く、それを承けての、心が「快活」になるとの道円の評価も、今日の白居易評ではあまり見かけない評価と言えよう。日本における流布本の位置を占めた、明暦版本の立野春節による跋文（万治元（一六五八年））は、日本における伝来過程に力点を置いた

叙述となっており、全体に訓点を付したこともあり、博士家点についての言及がある。先行する那波本との系統の差も意識されており、日本における『白氏文集』の批判的研究の嚆矢とも言えよう。三は出版における跋ではないが、林鷲峰「補点白氏文集跋」(延宝元(一六七三)年、『鷲峰先生林学士全集』巻百二)である。父羅山が那波本刊行直後に巻四十まで加点した本に五十六年後によく終巻七十一巻まで加点し終えた、その感慨を言うものである。明暦版本の訓点に誤りが多いことも言われており、出版された本がどのように読まれてゆくのか、実体が分かる作品である。この跋文は鷲峰の文集で読めるが、父子二代の加点本が東京国立博物館に現存しており、その書後に跋文が揮毫されている。

書物の伝来、蒐集、読書のわざをトレースすること、文学研究の本質を明示してもいよう。

(平成二十四年二月)